阿部知二全集

第2巻

阿部知二全集

第2巻

河出書房新社

阿部知二全集　第2巻

一九七四年六月十五日　初版印刷
一九七四年六月二十日　初版発行

著　者　阿部知二
装　画　平塚運一

発行者　中島隆之
発行所　株式会社河出書房新社
東京都千代田区神田小川町三ノ六
電話（〇三）二九二一三七一一
振替東京一〇八〇二

印刷　暁印刷株式会社
製本　中西製本印刷株式会社
定価は函・帯に表示してあります

目次

冬の宿 …… 5
幸福 …… 125
北京 …… 279
解題 …… 福田久賀男 381
解説 …… 野間宏 389

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

阿部知二全集　第2巻

冬の宿

第一章

……私の記憶はみな何かの季節の色に染まつてゐる。それは、映画のフィルムの一齣(ひとこま)づつがいろいろな色を持つてゐるやうなものであるが、その記憶のフィルムの色はいつも正確な暦の上の季節と一致してゐるといふわけではない。夏の日の出来ごとが秋の感覚を伴つて想ひ出されることもあり、秋のことが晩春の甘い色に染まつて想ひ出されることもある。また、ある年の冬ならば冬に、三日続いて起つたことの、はじめの日はほんたうに冬のやうに、次の日は春、その次の日は秋、のことでもあつたやうに錯覚されることもある。これはその事件の性質や、その時の私の心の状態や、その事件に出てくる人物たちの性格容貌などによつてさうなるのだと思つてゐる。

……いま、数年まへに霧島家に寄寓してゐたときのことを想ひ出すと、その秋から春にかけての出来事のすべてが、まつたく初めからをはりまですこしの隙(すき)もなく暗く冷却した冬の色に塗られてしまつてゐるのだが、これは、あの一家の生活状態、私のそのころの気持、すべてが春や夏のやうな空気の一つも持つてゐなかつたことのためであらう。そのころの私は地方の高等学校から出てきて伯父の家に泊つてゐたが、学校にもあまり出ず、快活に友達とつきあふのでもなく、まつたく人嫌ひな心持になつてゐた。その時代の風潮として、身に近い友達が争つて社会運動に入つてゆくのを見送りながら、心細い気持で古い外国の文学をばかり読んでゐた。華美な伯父の家の空気に反撥しながら、その従妹たちをとりまく娘たちのあれこれに恋愛してみたりやめてみたりしてゐた。そのなかで、庵原(いはら)はま江といふ音楽の好きな少女が、しばらく心安かつたがそれも夏の避暑地でほかの青年に出逢つてからは私を馬鹿にしはじめたし、友達のたれかれが官憲に逮捕されるといふやうなことがおこつたりしたので、私は一層孤独な気持になつてしまつて、どこかの下宿に一人で暮したくなつた。学校にも友人にも伯父の家にもなるべくかけはなれたところに行きたいと思つた。

ほのぼのと明るく暖かい秋の暮のある日に、私は省線のK駅に出任(でまか)せに降りてそのあたりの家をさがしてみた。線路の内側の高台には大きな邸宅が杜(もり)につつまれた段々になつて連つてゐたから、私を泊めてくれるやうな家はないと思つた。反対の側に出てゆくと、郊外の街道の両側に小さな貧しさうな店がつづき、町裏の低地には汚れた小工場が立ちならんでゐて、そこにも探すやうな家があるとも思へなかつた。仕方なしに、次の駅まで歩いてゆくことにして

ゐると、しばらく泥溝の匂ひの深い、暗い貧民街の家並がつづいてゐて、この低い家はどこまでもつづくやうにみえ、自分はどこに行つてゐるのかしばらくは見当もつかなかつたが、まもなく低地のひろがりは次第に狭まり、小さな石鹸工場のところまでくると、細い径がその工場の裏で、白ちやけた雑草の生えた崖につきあたり、崖の上には樹々と屋根が一面にいま落日に真紅に染まつてゐる小住宅街があるらしかつた。汚れた着物をきて遊んでゐる子供たちに怪しまれながら崖を伝つてその住宅街にのぼつてゆくと、そこは凸凹の多い一帯の高台で、下の工場からの煙で黒くなつた屋根が樹々にかこまれて不規則にならび、粗末な生垣のかげに小月給取などの住宅らしいものが肩をならべてゐた。その真ん中のあたりに来たと思ふとき、昔の武蔵野の名残りとも思はれる高い欅の樹立がそびえてゐて、いまは秋の落日のなかに、黄色に染まつた空から黄金色の枯葉を雨のふるやうに落してゐた。そのかげに、屋根に落葉をためた小さな古びた二階家が一かたまりになつて崖に寄りそひ、そこだけはひどくしづかなおもむきがあつた。

崖にひとかたまり白い花の群がみえたので近づいてみると、それは咲きほほけて色が褪せかけた野菊の花であつたが、その時、私は一軒の家の格子戸に「かしま」と細々とした女の手でかかれた半紙が半ばとれかけて風にひらめいてゐるのをみた。中に入つてゆくと三十を少しすぎた、色の白い女が出てきて上品に挨拶した。彼女は、私の田舎の母が昔のころ着てゐたやうな、渋く蒼い底光りをもつた地味な絹物をきてゐたが、この蒼光りする着物につつまれた彼女の白い円い顔、観音眉、黒い切長の眼、埴輪のやうに切れ込んだ口、また、静脈が一々浮びあがつてゐるやうな白い手などの全体が、私には古い陶器の光沢、硬さ、色、冷やかさ、を思はせた。部屋をみせてほしいといふと、どこかの地方訛のこつたなめらかな言葉で、顔を赤らめながら、すこし警戒するやうに、私の学校や今迄ゐたところや郷里を訊ねたのだつたが、学校とはあまりにかけはなれたこんなところに部屋を探しにきたことだけは少し不思議に思つたらしいが、ただ静かな生活がしたいからだと説明すると、そのほかに警戒することも無いと思つたのだらう、古風な屏風のある玄関から、粗末な木材のきしむ狭い階段を二階に案内してくれた。

二階には六畳と四畳半の二つの室があつた。南と西とに向いた六畳をかせようといふのであつた。窓からは真向ひに葉が疎になつた欅の樹立があり、その枝の間からは、西日に染まつた一帯の傾斜地の家並が、向ふの工場地、その向ふの高台へとつづいてゐた。西日に射しこまれて、ざらざらの壁面をみせてゐる部屋の中で、私の目についたもの

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook

も、この女の顔や着物に負けぬほど変つたところがあつた。小さな床には、古びた俳句の軸があつた。その草書は、私には、「すず虫の……」までしか判じられなかつた。壁の正面には、燕尾服をきた男の半身像の写真がある。彼は角刈の巨漢であつて、濃い眉と、大きな吊り上つた眼と、円く坐つた鼻と、黒々とした髭の下の大きな口を持つた四角な顔とを真正面から此方に向けて睨みつけ、襟には菊の造花を挿し、腕を背にまはして反りかへつてゐる。私は吹き出しさうになつたが、傍に立ちながら、私がその写真を見付けた表情を感じて、明るい光の中で頬を赤らめてゐる女を見ると我慢して眼をそらした。すると一方の壁には、気持のいい素描の版画があつた。疎な林のかげの草地のうへに、向ひあつてゆるやかに身を横たへてゐる男と女との素描である。ちかづいてみると「マティス」といふ署名があつた。巨漢の写真は、この抒情的な絵を、西日に火照つた室の中で睨みつけてゐるのだ。さらに眼をそらして、襖のあひだから隣の室をみると、この家の子供のものらしい机があり、小学校の教科書がのつてゐたが、その前には、濃厚な色刷りの、基督の絵が二枚ある。一つは、しろじろとした裸身に釘を打たれて血を真紅に流してゐる図であり、一つは跪いて天に祈つてゐる図である。

しばらくして私は細かい条件などきくこともなしに、いつのまにか、この室を借りる約束をしてしまつてゐる自分に気がついた。もう日は向ふの岡に沈んでゐて、室は暗くなり、マティスも巨漢もキリストも俳句も朧気になり、冷たい陶器の肌のやうな女の顔ばかりが蒼白く光つてゐた。これはどういふことになるのだらう、と思ひながら、前金を置くといそいで家を出た。室でみたさまざまのもの、女、着物、すべて、好奇心を惹いたことはほんたうであつたが、私はそれをどういふ風に結びつけて、その家をどういふ風に考へていいかわからなかつた。

その家に移ることにきめたと伯父に話すと、彼はその家が学校からは今の倍も遠くなるといふことを言つて苦笑したが、もはや勧告しても何にもならぬと思つたのであらうし、また伯父の子供たちに自堕落な風習を感染させる私を、かねて遠ざけようと思つてゐたのでもあらうか、止めようともしなかつた。後からこの移転をきいた友達も、何かの魂胆があつてさうしたのだらうと推測するほどのこともなく、ただ、ぼんやりとした精神状態の男にありがちな気紛れだらうといふやうに解釈したらしかつた。

移ることにした日の朝おきてみると、冷たい霖雨がしきりに降つてゐたが、その雨は時には氷片をまじへた霙になつたり、強い風を伴つたりして、たうとう三日間降りつづ

いてしまつた。そのあひだに、あの家について感じた私の少しばかりの好奇心もさめてしまひ、マティスもキリストも女も写真ももはや強い印象をあたへるのでもなく、しだいに引越しが億劫になつて行つたのだつた。晴れた四日目に身を起して荷物をまとめたのは、ただ、約束をしたからそれを実行するといふ負担を感じてゐたからであつた。

荷車がついたと思ふころに、坂路をその家に向つて登つてゆくと、泥濘の深いその路からみた一郭の風景は、あのときと別のものではなかつたか、と思ふほど変つてゐた。まだ晴れ切らず、時々、雪を含んだ灰色の雲が低く垂れてきてあたりを蔽ひ、欅の樹立はこの一雨に黄金の葉をすつかり落してしまつて、骨張つた枯枝ばかりを空にひろげてゐた。濡れた屋根の群は黒ずんでうづくまつてゐた。崖路の菊は雨に腐つてしまつてゐた。私を迎へてくれた女の顔は一層白く蒼ざめ、あの西日の中で火照つてゐた陶器の光沢ではなく、暗い冬の夕方にあたりの空気よりももつと冷たくなつて光を底に凍らせてしまつた陶器の感覚があり、その言葉も、凜として刺すやうな響きがあつた。室には、子供の机も、燕尾服の写真も剝ぎとられ、ただマティスの絵だけが残つてゐた。魔術のやうに変つてしまつた「冬の家」に私は入つてきたのである。マティスの絵をみたときそのことははつきり感じられた。四日前にみたときは、その絵の疎な林は、その枝と幹の線条のあひだに何かやはらかに光る若芽がついてゐると感じられ、樹々の奥には小鳥の声がきこえ、流れか泉かのさざめきさへあり、男と女とは青々としげつてところどころに花の咲いた草上に、抱擁のあとのつかれにでも身をよこたへながら、涼しい眼で互を愛のある心をこめてながめあひ、汗ばんだ肌を流れか泉かで水を浴びてあらはうとしてゐるやうにみえたのだつた。実際彼等の足元に粗略に描かれた草の線は、萌え立つ緑色、マーガレットの白、罌粟の紅さへ心の眼に沁むほど感じられたものだ。あたたかな風と、濃い空気の匂ひとが面面から流れてきてゐた。しかし、今は、林はただ裸木の骨組だけしかみえず、その疎な樹間からは冷たい風が吹き、地は凍てつき、枯草のうへの男と女とは、何か取りかへしもつかぬ過去をたがひに歎きあひ恨みあつて、身をすくめて慄へをこらへてゐるやうにしかみえないのだ。

女は茶をすすめながら、私について簡単に身分や経歴をきいた。今度は私がこの霧島家のことをきく番であつたらうが、私は世馴れた風にこんな女にききただす仕方を知らなかつた。壁面に白い跡をのこして消え去つた燕尾服の男は、この家の主人、門札に出てゐる霧島嘉門であるかどうか、一体この家は何をしてくらしてゐるのか——さうしたことをちよつと訊ねてはみたかつたが、結局、いそいでき

くことでもないと思つてやめた。女は、私の心を読んだのであらうか。平坦な口調でいつた。
「あのをかしな写真が主人でございます。今日はもう直ぐ勤めからかへつてまゐりますが、変り者ですからいろいろ失礼があるかわかりませんが、許して下さいますやうに。ほかに小学校三年の輝雄といふ男の子と、一年の咲子といふ女の子とございますが、上の方は悪戯で、下の方は泣いてばかり居ります。これも許して下さいまし。私たちは三年ほど前に、中国のあるところからこちらにまゐりました。」
さういつて、女は降りて行かうとしたが、襖のところで立ちどまつて、「あなたは基督教ではございませんか。」とたづねた。
「いいえ。」
「それでは基督教はお嫌ひではないでせうか。」
「好きでも嫌ひでもありません。」私は冷淡にこたへた。
彼女は「私どもはクリスチャンです。」と、驚くほど強くきつぱりといつて降りて行つた。
ひとりで荷を解いてゐるとき、子供たちが帰つてきた音がした、と思ふと、讃美歌の声がきこえてきた。
きよき岸辺に　やがてつきて
あまつみくにに　つひにのぼらん
その中に男の子の甲高い声と、弱々しい女の子の声とがききわけられたが、一番高くひびき、何か狂熱を帯びてゐるやうにひびくのは母の声であつた。飛んだところにきたものだ、これよりは伯父の家の軽薄な陽気さの方がよかつたかも知れぬ、と思つてゐるとき、母につれられて、挨拶しに、子供たちが上つてきた。兄も妹も母に似て色が白く、兄は神経質な眼と、濃い眉をもち、妹は長い睫毛のあるかよわい顔をしてゐたが、母の後から頭をさげると、恥づかしさうに降りて行つた。降りかけに、兄は眉をびくびくとさせたと思ふと、いきなり妹の髪の毛を引張つた。妹はひいひいと泣き出した。私は急いで従妹が餞別にくれた菓子を妹にやつてその頭を撫でたが、その皮膚は泡にさはるやうにやはらかく、融けてしまひさうに私の手には感じられた。私をおそるおそる見上げた茶色の眼からはとめどもなく涙が流れ出すのであつた。
階下からは夕餉の肉を煮る匂ひが流れ、主婦の讃美歌と咲子の泣きごゑとが、それからも、高く低くつづく夕方の街の物音と欅の梢に鳴る風の音とに交つてきこえてきた。私は疲れて荷物の片付けも中途でやめて、蒲団の山のうへに仰向きに倒れて眼をとぢ、その匂ひをかぎ物音をききながら、遠いところにひとりの旅にでもきたやうな気持になつてゐた。すると階段が今度はみしみしと大きく鳴りひび

いたので、眼をひらいて振りむくと、暗い踊場のところに、まづ、いが栗坊主の巨大な頭がみえ、支那人が『水滸伝』の豪傑あたりに臥蚕と形容した太い眉毛がみえ、それから、吊り上つてやや充血した眼玉、剃りあとの青い頬、大きな口、四角な顎があらはれて、ぴたりとこちらをみた。あの写真の主だな、と思ふうちに、いかり肩、厚い胸部、ふくれた腹、大きな腰、大きな脚部が、浪底からあらはれる海坊主のやうに階段から浮かびあがり、その六尺に近い身体が敷居の前に直立したが、急に私の前に坐り、私が居ずまひを直すひまもなく、耳に鳴りひびく声を発した。

「わたくしが霧島嘉門といふものです。内閣調査局に勤務して居ります。」

私は手短かに自分のことを紹介した。

「わたくしは留守勝ちですから、よろしく願ひます。留守勝ちですから。」と念を入れるやうに私を見据ゑた。

その体は恐しいほどいかめしく、声は大きかつたが、しばらくするうちに、それには何の邪気もない単純さがあるだけのことで、暴々しくみえる形相すらが、威張つた子供の顔のやうに他愛ないものでないかと、思ふほどの余裕が出来たので、私は持つてきた菓子をすすめ、煙草をすすめた。

「わたくしはクリスチャンですから、煙草はやりません。」

今度のその声の大きさには、やや落ちつきを取戻しかけてゐた私もまた驚いてしまつた。それは家中を震動させたのである。とみると、彼の手はそのときにもう一本の煙草を掴んで、喘ぐやうに低い声で「一本いただきます。」といつた。

「実は家内にきこえるやうにああいつたのです。」彼が最初の煙を厚い胸の奥深く吸ひこむときに細めた眼の色、ぱッ！　と吐き出したときに開いた眼の輝きをみてゐると、これはただの煙草でなく、世にも珍しい麻酔薬のやうなものでもあるやうだつた。

「わたくしの一家は落ちぶれてしまつたものです。今はまつたく窮地に陥つて、他人に間貸しまですることになつてしまひました。どうぞよろしく。」

私はここで大体この家のことは想像ができると思つた。この主人、妻、子供たちの体質や容貌にも、どこかに特異なものがあり、部屋の調度や服装にも変つたところのあるのも、かつて彼等が地方の旧家ででもあつたといふことで説明はつくわけだ。どうして落魄したか、それがどうして基督教徒であるか、などといふことは分らないにしても、これは別に浪漫的な好奇心を湧かすことでも何でもない、といままでの私の好奇心を笑ひ、また少しはがつかりしたのである。

嘉門は菓子をむさぼり、煙草の匂ひを消すためだらうか、茶を何杯も飲んで口をがらがらと鳴らせたが、立ち上つて私を銭湯に誘つた。彼のあとからついて降りると男の子が私に口を曲げて「い、い、い。」といふ風をしてみせたが、それは私が彼の妹を可愛がりすぎたと思つて嘲弄したのだらう。嘉門は、「まつ子！　風呂にゆくから飯を早くこしらへて待て！」と呶鳴りながら、汚れて古びた黄八丈の丹前ときかへ、肩をふりながら日暮れの街に私を従へて出た。夕飯前の銭湯は一杯の人だつたが、労働者よりは勤人が多いとみえて、みな私と似寄つた蒼白く薄く細いからだの裸形が湯気の中に入りみだれてゐたのだが、その群の中に裸になつて立つた嘉門の堂々たる体軀はたちまちみなを威圧してしまつた。黒々と毛が生えた胸板、大きな腹、腰、腿、が、皆をかきわけて進むときに、他のものの体は影のやうにしかみえなかつた。彼は改めて私のからだをみて、憐むやうな顔をしたが、一番熱い湯が出てゐるところに飛び込んで行つて、ざぶりと頭ごと漬つてしまひ、しばらくして太い息を吐いて頭だけあらはし、太い頸のついた頭を、海豹のやうにぶるぶると振つて水をとばし、それからまた驚くほどながい間湯につかつてゐたが、やがて水沫をあげて全身をあらはした。全身は真紅に輝いてゐた。私はただ感歎して彼を見つめた。

夕飯にはみなで一緒についた。私は箸をとつて食はうとするとき、ふと皆がうなだれてゐるのに気づいた。まつ子が静かな夕餉の祈りをしてゐたのである。嘉門は、「アーメン。」と大声でいつて、もう肉切れに嚙りつき、それから幾杯となく飯をかへ、お菜が少いといふのであつた。輝雄は隣の妹を始終いぢめてゐる。嘉門は忙しく口を動かすひまひまにそれに気づくと、輝雄をしかりつける。まつ子は、輝雄をかばつて嘉門をたしなめる。「何くそ！　貴様の教育が悪い。」と嘉門が妻に食つてかかる。咲子はそのあひだにもうひいひいと泣いてゐる。

「お恥づかしいことです。」とまつ子は眼を伏せていつた。

「ははは、クリスチャンといつてもうちのはまだ充分ではないので、家内に引きずられてゐるのです。」と嘉門はいつた。

それから彼は、なかば愚痴のやうに、なかば自慢するやうに、彼の家の歴史を話してきかせたのだ。その歴史の立派な部分には、まつ子も眼で同意をするのだが、零落してゆく区切り区切り——それはいづれもみな、嘉門の愚行のためであるが、その点を嘉門がごまかしてはなすときには、いかにも口惜しさうな顔をし、それから諦めの色をうかべる。

……霧島家は、瀬戸内海に向つて北に山を負つた地方の

旧家であつた。昔は、田地と、広大な塩田と、回送船を持つてゐて、嘉門はそこの長男に生れて思ふままの栄耀をしてくらした。彼の地方で最初に自転車にのつたのも、オートバイを買つたのも彼である。中学にも行けないほど我儘に育つて、もう少年のころから遊蕩の味を知つてしまつた。二十すぎの頃父をなくしてからはまつたく思ふままにくらした。紡績工場を造つて社長になつたがこれはすぐ飽きて、他人に渡してしまつた。人に煽てられて郡会議員になつた。

「ああ、あの二階にはつてあつた写真を御覧でしたか。あれは僕のその頃です。あれは、立憲民主党の犬田剛先生を迎へて演説会をしたとき、司会者をした記念です。」といひながら嘉門は立ち上つて腕を後にまはして胸を張つて、張り裂けるやうな大声で、「諸君！　今回は這界の泰斗犬田先生を迎へまして……。」と、さけんでみせた。まつ子は顔をしかめてゐた。

……あまり馬鹿なことばかりするので、親戚の者に無理矢理にこのまつ子と結婚することをすすめられたのは、だいぶ歳をとつてからであるといつたが、年齢の相違から見るとまつ子は二度目の結婚の妻かも知れないが、そのことはその時言はなかつた。ただ近在の衰へた旧家から何も知らぬ娘を貰つてきたのだといふことは、まつ子が今でもその親たちを恨み、自分の自覚が足りなかつたことを悔んでゐると、後で私にはなしたことでわかる。私はある春に霧島家の郷土のあたりを旅行したことがあつた。花崗岩質の山はところどころ白い肌をみせながら松の樹に蔽はれ、樹蔭には赤と紫とのつつじが咲いてゐるのがみえてゐた。海は紫白色にのどかに日に輝き、山から海にかけては仄白い霞が一面にこめてゐた。山と海とのあひだには狭い平地があり、麦が伸び、菜種の花がさき、雲雀は霞の中に舞ひあがつて啼いてゐた。柑橘のみのつた丘のかげの入江にそそぐ川のふちには白い倉のある家が立ち、帆柱が家々の屋根のかげにみえる。松並樹を越えると広い塩田がつづき、その向ふに海が光り、遠い島のかげが紫色にみえる。まつ子はかうしたところの白い道を、長い行列をつくつて霧島の家に運ばれて、一夜にしてこの巨大な粗暴な男に身を任せてしまつたのであらう。そして、子供が生まれるころには霧島家の財産はまつたく崩れてしまつたのだ。

直接に没落の動機になつたのは放蕩でもなく、政治運動でもなく、彼の県の生糸の全部を、ある人におだてられて買占め、それが欧州大戦後に遭遇したために暴落したことであつた。嘉門は財産整理をした親戚たちのために、いくらかの金をあてがはれて禁治産になつてしまつた。郷里で威張つてゐた彼は、恥を忍ぶ気にはなれないで、その金を

试读结束：需要全本请在线购买： www.ertongbook